

# 保育者養成における芸術表現の可能性 —山口とも「ガラクタえんそう会」を手がかりに—

谷口 幹也・中村 紗和子・村上 太郎

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間発達学専攻

北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2018年5月28日受付、2018年7月4日受理)

## 要 旨

本研究では、平成29年度に九州女子大学で実施された廃品打楽器演奏家・山口ともによる特別講座「ともともと遊ぼう！ガラクタえんそう会」(演奏パフォーマンス+ワークショップ)に着目し、ワークショップの省察、山口ともワークショップ参加者へ発話と同氏へのインタビュー記事の省察、アンケートと幼稚園教育要領の考察を行い、保育者養成におけるアーティストの役割と、芸術表現の意義とその可能性とは何かを考察している。本研究を通じて保育者養成におけるアーティストの役割とは、日常や常識を捉え直す複眼的思考を促す点、「遊び」を再認識させ、「試みる心」を活性化させる点が明らかになった。保育者養成における芸術表現の可能性とは、表現活動を通じて人をつなげ幾度となく人を励まし勇気づけること、そして「まなびほぐし」の機能であると結論づけられる。

## はじめに

保育者養成機関において教鞭をとっていると気になることがある。学生たちの多くが「表現する」ことに憧れを抱いているのと同時に、抵抗感や苦手意識を表明する学生が少なくなっていくことである。例えば音楽表現にしても、学生たちに限らず大人はいつしか音階に縛られ、音を奏でることを純粋に楽しみ、夢中になることを忘れてしまう。楽器を演奏する時の緊張、間違ったらどうしようという戸惑いが多くの人々の心を硬直させる。本研究では、この表現することへのこわばりや緊張に着目し、平成29年度に告示された学習指導要領、幼稚園教育要領、保育所保育指針の改訂を踏まえ、保育者養成における芸術表現の可能性を探求する。

具体的に本研究では、平成29年度に九州女子大学で実施された廃品打楽器演奏家・山口とも氏(以下、敬称略)による特別講座「ともともと遊ぼう！ガラクタえんそう会」(演奏パフォーマンス+ワークショップ)に着目し、ワークショップの省察、山口ともによるワークショップ参加者への発話と同氏へのインタビュー記事の精読、特別講座に参加した受講者の自由記述によるアンケートをもとに、保育者養成におけるアーティストの役割、芸術表現の意義とその可能性とは何かを考察する。

## I アクティブ・ラーニングと保育者養成

平成29年度の幼稚園教育要領、各種学習指導要領の改訂の前段階として、教育現場においては、「アクティブ・ラーニング」をめぐる議論や検討が盛んに行われ、中央教育審議会(2016)では、児童生徒が「主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を発揮し、より良い社会と幸福な人生の創り手となる力を身につけられるようにすることが重要である」<sup>1)</sup>という方針が立てられた。教員・保育者養成の文脈においても、教師・保育者をめざす学生がアクティブ・ラーニングを実現できる力量形成とその体験の必要性が指摘され、主体的な学び、そしてグループで協力し活動することへの教育的な視点が重視されるようになった。

以上の状況を踏まえ、九州女子大学人間科学部人間発達学科人間発達学専攻では、大学1年次に実施する授業「スキルアップ講座J」を、問題解決型のアクティブ・ラーニングプログラムとして実施している。本授業は、教育・保育者養成における基礎的能力育成のためのメソッドの確立を目指し、集中講義形式(開講時期:7月~1月)で行っている。学園祭期間中の「こどもまつり」という催しの実施を学びの機会の中核に据え、学生の主体的な学習者としての自覚を促し、教育・保育における問題を把握する力、問題解決のための企画・実行力、実社会で求められるコミュニケーション能力の育成を目指している。こどもまつりでは、学生が主体となって製作遊びやゲームなどを企画・準備し、期間中に近隣の幼稚園や保育園に通う幼児や小学生などを対象に遊びの場を提供している。これらの催しを企画運営するための場と時間を教員が用意し、調査、企画、運営、記録、報告の階梯に則り自主的な学びを推進している<sup>2)</sup>。

この取り組みの現在の問題点は、幼稚園教育要領に明示されている「遊びは学習である」ことに関する理解が乏しいために学生たちの実施する活動が、表面的に子どもが遊んでいること、「遊ばせておく」ことに終始するといった場面が散見される点である。

そこで本研究で取り上げる特別講座「ともともと遊ぼう!ガラクタえんそう会」では、スキルアップ講座Jをスタートするにあたって、「遊びは学習である」ことを学生自身の実体験を持って理解し、主体的・対話的で深い学びを学修することを目的とし企画された。

## II 特別講座「ともともと遊ぼう!ガラクタえんそう会」

### 1. 講師・山口共の略歴

山口共は、「音楽=音を楽しむこと」をモットーに子供から大人まで楽しめる音楽を目指し、オリジナル廃品楽器を使ったパフォーマンス活動をして注目を浴びている打楽器奏者である。同氏の祖父、山口保治は「かわいい魚屋さん」「ないしょないしょ」など数々の童謡を創った作曲家であり、同氏の父、山口浩一は、新日本フィルハーモニー/ティンパニー

名誉首席奏者である。山口は、1995年の音楽劇「銀河鉄道の夜」をきっかけに廃品から様々なオリジナル楽器を作るようになり、1998年5月、日本打楽器協会主催の打楽器フェスティバルに参加して、さまざまなガラクタ楽器で演奏を行っている。その際、ニューヨークのパークカッショングループ“パルス”と共演し、1999年、ニューヨークのクイーンズカレッジのコンサートホールでガラクタ楽器のパフォーマンスを行った。2003年4月から2006年3月までNHK教育テレビ「ドレミノテレビ」に“ともとも”の愛称でレギュラー出演し、日本各地でガラクタ楽器によるパフォーマンスとワークショップを実施している。<sup>3)</sup>

## 2. 特別講座「ともともと遊ぼう！ガラクタえんそう会」の概要

特別講座の概要は以下の通りである。

日 程：平成29年9月14日（木） 午前の部：10時00分～11時30分

午後の部：13時30分～15時00分

会 場：九州女子大学 耕学館E201教室

参加者：九州女子大学人間科学部人間発達学科人間発達学専攻1年生121名（18グループ）

以下、山口による著作、『ともともと遊ぼう！ガラクタえんそう会』<sup>4)</sup>、『ともともと一緒に音あそび』<sup>5)</sup>を参照し、具体的に紹介する。

### （1）午前の部 ともとの演奏タイム

特別講座の冒頭、山口によるオリジナルの廃品楽器の演奏が行われた。山口は、一斗缶を頭に被り、二つの一斗缶を足に履き学生たちの前に登場した。山口が作る楽器は、いらなくなった材木を発泡スチロール箱の上に並べたもの、太さや長さの違う束ねられた塩化ビニールのパイプ、円筒形の空き缶二個を太いスプリングでつないだもの等、楽器とは本来無縁のガラクタである。これらを、足に着けてステップを踏み、スリッパやしゃもじで叩き、様々な音を奏でる。

オリジナルの廃品楽器のパフォーマンスの後、山口がリードし以下の活動が展開された。

#### ①「しんぶんぶん」で楽しむ

山口は手に持てる大きさに切り出した一枚の新聞紙を使い、扱い方一つで音を出る楽しいものへと変化する体験を提供した。この活動は、簡単にものの見方を変え、リズムを刻むことの楽しみを体感する入門編に位置付けることができる。

#### ②「ペッカー」をつくろう

学生が持参したペットボトル2個（同型のもの）でシェイカーを作る。山口はペットボトルでつくるシェイカーということで、これを「ペッカー」と称している。同型のペットボトルを、中央で二つに切り分ける。飲み口が付いているもの二つと、底側が二つ。切り分けた側に切り込み口を入れ、同じ形同士を合わせると、ぴったりとはまる。合わせたペットボトルを開き、お米やビーズを入れ閉じる。思い思いにテープを巻きつけ、装飾を施す。出来上がったペッカーを全員が手に持ち、山口の掛け声のもと音を鳴らし楽しんだ。

### ③ 「ショッキンキン」「ビー玉スティック」でたたいてみよう

山口は割り箸を使って茶碗や湯呑みを叩いてみるとやわらかな繊細な音が出ること（ショッキンキン）、スプーンやフォークもマレット（木琴や鉄琴の演奏に使うばち）の代わりになること、針金ハンガーの先にペットボトルの蓋やビー玉を付けるとマレットになることを伝えた。手作りマレットを手に入れば、いろんなものを叩きたくなる。木の板、空き缶、鍋やフライパンもたたいてみるといい音が出る。同じ木材でもたたく位置や、たたくものの素材で音が変わる。山口は、学生たちにいろいろ試して、自分にとって心地良い音を探してほしい、と伝え午前の部が終了した。

#### (2) 午後の部 ワークショップ

学生には事前に、執筆者らから「音を出したら楽しそうなモノ」を持参してくるよう指示をしておいた。学生が当日持参したガラクタは、ガラス瓶やスチール製の箱、お菓子の空き箱などであった。筆者らが、事前に会場に用意した材料は以下の通りである。

発泡スチロールの空き箱、鉄パイプ、ビー玉、木の端材、空き箱、針金ハンガー、竹、バケツ、粉ミルクの空き缶、ガムテープ、ビニールテープ、糸、空き瓶、米、ビーズ等。

これらは、大学内の物置や図工準備室内にあったもの、ホームセンターで購入したもの、近隣の保育所に協力を依頼して収集したものである。本来ならば、学生たちが自分自身で十分に材料を収集する時間と機会を設けなかったが、夏休み期間中の一日のみの特別講座ということを考慮し楽器づくりの材料と素材を事前に用意することとした。

学生各々が仲間と協力し、音を探し楽しみながら自分だけのガラクタ楽器を作り上げた。全グループ、18グループ毎にオリジナル楽器の演奏を行い、学生たちは緊張しながらも自分たちのアイディアとリズムで演奏を行なった。そして最後に全員が山口と共にガラクタ楽器の演奏を行い終了した。

## III 山口ともに見出すに芸術表現の方法と視座

### 1. 特別講座の構成

山口の特別講座の構成は、「出会い」「参加」「共有」である。午前の部の「ともとの演奏タイム」、入場パフォーマンスの後に行われた「楽園の音」のパフォーマンスは圧巻であった。いつも使っているモノや何気なく捨ててしまうモノが色々な音を出し独特の音楽が奏でられた。そしてスプリングを弾き生み出された「宇宙の音」はとても魅力的なものであった。山口のパフォーマンスを十分に味わい、「面白い!」「やってみよう!」という気持ちを喚起する「出会い」の場となった。

山口は、この「出会い」をつくるためにガラクタを付けたドラムセット、数々のガラクタ楽器を大学の教室に持ち込んだ。それらはガラクタといえど格好が良く、使い込まれ、山口が愛着を持ち大切にしているものであることが伝わってくる。そして山口は、モッズスーツ

を着用し、もみあげが印象的な髪型で終始講演を行った。この山口のふるまいと演出は、特別講座が、単純なワークワークショップではなく、異質なものと「出会い」の場、特別な時間であることを実感させるために非常に効果的であった。

午後は、「参加」の時間である。午後の部では、山口は研究者のごとく白衣をまとい再登場する。そして参加者一人ひとりの探求が進むようファシリテーターとして活動した。学生達は、思い思いに針金ハンガーを切り分け、ビー玉や、ペットボトルの蓋を取り付けた。板や空き缶を叩き、心地よい音、好きなリズムを探す。様々なガラクタ、材料を手に取り音探しをしながら楽器をつくる。各人、各グループが作り終えたあと、18グループがグループごとに演奏を行った。「共有」の時間である。どのグループも緊張した面持ちでガラクタ楽器の演奏を行うのだが、山口がやさしく合いの手を入れ、18グループが飽きることなく演奏を行い、その時間を全員で共有した。

山口の特別講座の構成の特性は、一方的に演奏を聴かせるだけでなく、ガラクタ楽器をつくる時間を設定し、ガラクタ楽器の演奏を参加者と共に行い、その体験を「共有」する点である。山口はミュージシャンとしての手の内を明かし、それを子どもたち、ワークショップ参加者に提供し共有することを望むのである。学生にとっては、アーティストと共に過ごした時間は鮮烈に記憶に残る。山口の特別講座は保育者養成機関での学びに必要な要素「出会い」「参加」「共有」を盛り込んだ理想的な構成であったと言える。

## 2. 山口ともの視座

次に、特別講座当日の山口の発言と提示、雑誌『じどうかん』<sup>6)</sup>における山口へのインタビュー記事と学生アンケートから、山口に見出す芸術表現の方法と視座を整理してみたい。

### (1) 「見る目を変える」

山口が特別講座において、もっとも強調したのは、「見る目を変える」＝複眼的思考である。雑誌インタビューにおいて山口は「まずは、子どもならではの発想を否定せずに褒めていく。楽器作りにマニュアルがあるわけでもないですからね。そうやって一緒に考えていく中で、子どもは新たな発想を生み出していくんです」<sup>7)</sup>と述べている。手早く完成させることを大事にするならば、こういった視点は生まれない。山口の子どもに向けてのアプローチ、子ども自身の視点を重視し、それぞれの気づきと想いに寄り添うことは、大学生を対象としても変わりはなかった。山口は次のように語っている。

「発想を広げるって大事なことです。それが鳴るか鳴らないかは分かってくなくていいんです」<sup>8)</sup>。山口は常に「どうしたいの?」「どうやったら音が出るかな?」と、問いかけ様々な角度からモノを捉え直すこと、見てみることを促す。

特別講座に参加した学生は次のように述べている。「普段ガラクタなんて捨てて、ゴミになるだけなのに、こういう使い方もあることが分かって、普通のゴミにも楽しさがつまらなくなりました。みんなと演奏した時にも、あわさったら、こんなにも良い音がでると感

じて、興奮しました」(N.H)。

## (2) 「音を楽しむ」

多くの学生が、楽器を演奏する時に怖じ気ついでしまう。それは間違ってしまうこと、失敗することを恐れるからだ。山口は以下のように述べている。「『ドレミ』の音が出る楽器ができると、曲を演奏できます。でも、なんで曲が演奏できなければいけないのって僕は思うんです。曲を演奏するとなると、音が決まってしまうから、どうしても『間違えちゃったらどうしよう』という余計な気持ちが生まれてしまう。これ、ものすごく邪魔なんです。僕がやろうとしているのは『音を楽しむ』ことなんです」<sup>9)</sup>。

参加学生は次のように述べている。「最後の班ごとでの演奏では、皆と練習して一つのものを作りあげる達成感なども感じる事が出来ました。そして、なによりもこの活動を自分自身がすごく楽しんで取り組むことが出来ました」(T.S)、「こどもたちと同じ目線に立って一緒に楽しむことの大きさに気付くことができました」(N.C)。

山口は次のようにも述べている。「地球上にあるものには、すべて音があります。その音を知る。それを楽しむ。自分でつくった楽器なんだから、間違いようはないんです。好きにやれば、それだけでいい。何でもありの世界です。純粹に、自由に音を楽しんでいる子どもを褒めてあげることが、子どもの発想、自由さ、純粹さを伸ばすことになるのではないのでしょうか」<sup>10)</sup>。

## (3) 「間違ってもいい」

特別講座の中で、ひとときわ学生達の心に響いたのは、「間違ってもいい」という山口の言葉であった。「間違ってもいい」そして「試してみよう」という山口の言葉は、保育養成における芸術表現を考察するにあたって最重要である。山口は、自分にとって心地の良い音を探ること、叩いたり、弾いたり、「試す」こと自体を楽しんで良いことを学生達に語りかけた。

以下の学生の言葉は、山口から得た言葉によってふるえる心情を詳しく示している。

「ともさんから人前で演奏するときに間違ってもいいというお話をされたとき、私は心に余裕が出来ました。人前で発言したり、行動することに周りの目を気にしがちで積極的でない自分にとっても勇気を与えられました」(K.M)。

山口は、「発想を変えれば、なんでも楽器になる。身の回りに楽器の材料となるものは、あふれている」<sup>11)</sup>と語りかける。そして遊ぶこと、楽しむことを提案したのであった。

## 3. アーティストとしてのこだわり

山口が学生に対し、楽器作りの場面で強調したのは「愛着」と「カッコイイと思える」という言葉であった。山口は、「『この程度でいいや』と思って適当に作ったものや雑に作ったものは、それなりの音しか出てきません。いろいろな人のアイデアを盛り込んで、丁寧で作るといい音がします」<sup>12)</sup>と述べている。そして「ショーの時は衣装を着たり、楽器を沢山持っていますが、チャチなものは見抜かれちゃうんですね。逆に『本物』は、ちゃんと感

覚でわかっているんです。音だって格好いい音とか、凄いつてしっかり感じている。子どもは騙せませんから、本物を作らないとダメなんです」<sup>13)</sup>と語る。

山口は「見る目を変える」「音を楽しむ」「間違ってもいい」と語りつつ、同時に自分なりに「こだわり」を持つことの大切さを強調する。この「こだわり」が人の心を動かすのではないだろうか。山口が唯一無二の存在である理由は、ここにある。山口は常に優しく語りかけ、寄り添い活動を進めていた。そしてこの「こだわり」を示すことによって、誰もが憧れを抱くガラクタ演奏を行い、また見たい、時間を共にしたいと思わせるのである。

#### IV 考察 保育者養成における芸術表現

##### 1. 幼稚園教育要領と特別講座

平成29年度に告示された幼稚園教育要領、学習指導要領において、「主体的・対話的で深い学び」の重要性が明示され、これからの教育の基軸となる方法が示された。この日本の教育の基軸を鑑みる時、山口による特別講座から、どのような知見を得ることができるだろうか。

まず言えることは、先に見てきたように山口の特別講座で示した姿、ワークショップの構成、演奏法は、まさに「主体的・対話的で深い学び」を実現していたということである。山口はまず“主体的に”試すこと、探すこと、楽しむことを参加者に提案し、共に“対話的”に関わり合いながら、気づきや驚き、喜びを他者と共有することを促していた。そしてガラクタ楽器の演奏の機会を通じて、より面白い、心地よいと思えることを探求することを促した。

また、幼稚園教育要領には、「教師は、幼児との信頼関係を十分に築き、幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする」<sup>14)</sup>とある。

山口の特別講座参加者への関わり、発話の姿勢は、まさにこの文章に示されている姿そのものであった。「どうしたいの?」「どうやったら音が出るかな?」と学生たちに問いかける発言、十分に試行錯誤する時間を担保し、そして「試みる」こと自体が重要であるという姿勢は徹底していた。参加者の主体性を尊重し、常に寄り添う姿勢を示し、試行錯誤することを十分に経験できるように学びの場を計画、構成することは、幼児を対象とする学習の場だけではなく、すべての年齢を対象とした学びにおいても重要である。

そして幼稚園教育要領に明示されている「遊びは学習である」ことについても、山口の活動は大いに参考となる。山口自身がガラクタ楽器作りに夢中になり、さまざまなガラクタ楽器を作り、それらの楽器に自分なりに名前をつけ楽しみ、自分自身のオリジナルの演奏法を生み出している。その自身の経験に基づき、「遊び」そのものが新たな気づき、深い喜びを生み出す「学び」の機会となることを特別講座において示していた。

## 2. 「まなびほぐし」と芸術表現

本稿の冒頭に述べた通り、多くの学生が楽器を演奏すること、表現することに苦手意識を持っている。この苦手意識を持った学生にとって、山口による特別講座は、どのような意味を持ち得たのだろうか。学生たちのアンケート、自由記述文を見ると、特別講座を通して音楽に対して、表現することに対する考え方、捉え方が変わったことを述べていることに気がつく。

筆者らは、この学生自身の考え方や捉え方が変わったことを、かつて哲学者・鶴見俊輔(1922-2015)が述べていた「まなびほぐし」だと考える。まなびほぐしとは、鶴見が自身の体験を紹介したエピソードに基づく文言である。鶴見がハーバード大学の学生だった頃、ヘレン・ケラーに出会った際、鶴見が学生であることを知ると、ヘレン・ケラーは、「私は大学でたくさんのことをまなんだが、そのあとたくさん、まなびほぐさねばならなかった」と言ったそうである。その「まなびほぐす」というのは、「アンラーン (Unlearn)」のことであり、鶴見はそのときはじめて聞いた言葉だが、今すぐわかったという。「型どおりにセーターを編み、ほどいて元の毛糸にもどして自分の体に合わせて編みなおすという情景が想像された」とのことである<sup>15)</sup>。アンラーン (Unlearn) とは、単に“捨て去る”、“忘れる”の意味ではなく、今まで学んだことがらを、既習の知識に囚われず自分の経験に照らし合わせ再構築することと言えらる<sup>16)</sup>。

「まなびほぐし」という言葉を、特別講座において学生たちに内的に起こったことに置き換えて考えてみると、これまで自分の中で当たり前と思っていた「ガラクタから、いい音は出ない」「演奏を間違っはいけない」「人前で演奏することは恥ずかしい」といったことを疑い、山口による特別講座における「見る目を変える」「音を楽しむ」「間違ってもいい」という経験によって解釈しなおしていると言える。特別講座に参加した学生は、以下のように山口の演奏について述べている。「ともともが演奏しているのを見て、心を打ち抜かれました。輝いて見えました。楽器に演奏するのにもルールや規則が無く、自由に幸せそうに演奏していたのでこっちまで幸せになりました」(M.A.)。

山口のガラクタ楽器の演奏と、共に楽しんだガラクタえんそう会は学生の「まなびほぐし」のきっかけを作ったと言える。

## 3. 保育者養成における山口の方法と視座の意味

「山口とも」というアーティストは、保育者養成機関において学ぶ学生にとって、この上ない「出会い」をもたらし、その具体的な手法、視座を教授したといえる。山口の表現、ワークショップの方法と構成は、幼稚園教育要領に示されている「遊び」の本質を見事に捉えている。そして「主体的・対話的で深い学び」を実現するための具体的な視点が網羅されていた。

保育の現場において、保育者は、幼児が「試す」ことを繰り返しながら主体的に「遊ぶ」こと、



そして遊びが発展して様々な気づきや「学び」が生じる場を作らねばならない。山口にならうっていうと、「音を楽しむ」ことを大切にするために「耳をすまし」「間違いを恐れず」に「表現を楽しむ」ための環境と機会を作らねばならない。しかし、その環境と機会をつくる保育者自身が、美術教育、音楽教育等、芸術関連の学びの機会において十分に主体的な活動を行った経験、「遊び」の経験がなければ、苦手意識に苛まれ、積極的に環境と機会づくりを行おうとは思わないだろう。

特別講座に参加した学生たちも、長年、経験してきた美術教育、音楽教育によって、苦手意識が醸成されてきたともいえるかもしれない。この問題は、別の機会に考察を試みたいと考えるが、まず言えることは保育者養成機関における芸術表現は、「遊び」を出発点として発展すること、その原理を実践をとおして学ぶことが保育者養成の場において必要である、ということである。そのためには、具体的に、保育の場で実践できる「遊び」を基軸とした主体的・対話的で深い学びの方法と構成を学ぶこと、そして最重要なのが先に述べた「まなびほぐし」を経験することが重要となる。

では、「まなびほぐし」するにはどうすれば良いのか。筆者らが考える一番効果的な方法は、保育者として成長することを念頭に置き、様々なこととの「出会い」を大切にする、山口の特別講座に見出せる自ら「出会い」「参加」「共有」する学びと創造を経験することである。第一筆者の谷口が関わってきた現代アートの分野から述べると、現代アートは、現代社会のさまざまな側面を究極的な表現で切り取り、アーティストは常に新しい表現を求めている<sup>17)</sup>。そして私たちは、アートに参加することを通して、多様な表現に出会い、異なる価値観や考え方を認めて生きていくことの大切さを知ることができる。この現代アートの今日的な役割、社会的機能を特別講座にあてはめるならば、私たちは、山口ともというアーティストが切り開き、こだわり抜いたもの（ガラクタ楽器・演奏）と出会い、対峙することができた。

私たちは、山口のように現在を生き、何かに夢中になり、特別な技能や表現を行なっている人と出会い、自分ひとりでは気づかなかった発見、主体的で対話的な創造活動を何度も経験することによって「まなびほぐし」の機会を得ることができるのではないだろうか。それは保育者養成機関のみの問題ではなく、社会が人の心を支え、解放する「まなびほぐし」を経験する場や環境、機会をどう整備できるかという問題でもある。それは平成29年度に改訂された学習指導要領、幼稚教育要領において示された新たな時代において新たな価値を生み出すための教育を実現するためにも必要となるだろう。この課題を探求するために今後、芸術表現の多様性と、その今日の在り方を、保育者養成の場においても示し探求することが必要となる。山口のガラクタ演奏に見出すことができるように、芸術表現はとても素敵なものであり幸せを感じさせるものである。山口が特別講座において強調したように「間違ってもいい」、表現者となることがこの上ない高揚感をもたらす多幸感を生むことを、学生及び保育者自身が自分の経験を持って理解することが必要である。そしてそれは自ずと保育者養

成における芸術表現も役割であり課題、そして可能性であるといえよう。

## V 結論

### 1. 保育者養成における芸術表現の可能性

山口に見いだすことができるように、「遊び」が児童生徒の主体的・対話的な深い学びを牽引し、また次の段階へと発展させる。芸術表現、異質なものと「出会い」は、大きな効果を産む。それは「まなびほぐし」を誘発する。本研究を通じて保育者養成におけるアーティストの役割とは、日常や常識を捉え直す複眼的思考を促す点、「遊び」を再認識させ、「試みる心」を活性化させる点が明らかになった。そして芸術表現の意義として、表現活動を通じて、人をつなげ創造性の発露によって、幾度となく人を励まし勇気づけることにその可能性を見いだせる。保育者養成における芸術表現は、山口に見出すことができた「まなびほぐし」の機能、そこに可能性がある結論づけられる。

### 2. 本研究の課題と展望

山口による特別講座、パフォーマンス、発言、ワークショップの構成は、大学における保育内容関連の授業を省察する視点を持っていた。今後も継続的に比較検討を行い保育所養成における授業研究、カリキュラム研究に発展させていきたいと考えている。特に九州女子大学人間科学部人間発達学科人間発達学専攻で実施している授業「スキルアップ講座J」のカリキュラム研究を継続し、学生がつくる「遊びの場」が芸術表現の体験によって、どのように質的に変化するのかについて研究を推進していきたい。また、まなびほぐしに関する研究についても最重要テーマとして継続的に研究を行う必要がある。今後、本研究では十分に検証することができなかった日本各地でのアーティストと大学の協働、連携に関する調査が必要であると考えている。本研究の成果を海外及び国内の事例と比較検討し、より汎用性の高い研究成果を導き出すことが今後の課題である。

## 謝辞

山口とも氏にとって大学でのガラクタ楽器の演奏、ワークショップははじめてとのことでしたが特別講座の趣旨をご理解くださり講師依頼を快くお引き受けくださいました。特別講座に積極的に参加してくれた学生たち、材料収集、広報にご協力下さいました北九州市福祉事業団の皆様、山口とも氏に篤く御礼申し上げます。

## 註

- 1) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(答申)、平成28年12月21日付、参照。
- 2) 中村紗和子編著『子どもと学ぶ - 調べ、考え、行動するためのワークブック -』九州

- 女子大学人間科学部人間発達学科人間発達学専攻、2017年、参照。
- 3) 山口とも | TOMO OFFICE ホームページ参照。
  - 4) 山口とも 『ともともと遊ぼう！ガラクタえんそう会』 リットーミュージック・ムック、2006年。
  - 5) 山口とも 『ともともと一緒に音あそび』 TOMO OFFICE、2015年。
  - 6) 児童健全育成推進財団 『じどうかん』 春号 No.56、2010年。
  - 7) 同上、2頁。
  - 8) 同上、2頁。
  - 9) 同上、2頁。
  - 10) 同上、2頁。
  - 11) 同上、2頁。
  - 12) 同上、3頁。
  - 13) 同上、3頁。
  - 14) 文部科学省 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館、2018年、288頁。
  - 15) 鶴見俊輔 「対談の後考えた - 臨床で末期医療を見つめ直す」 『朝日新聞』 2006年12月27日付朝刊、参照。
  - 16) 苜宿俊文、佐伯胖、高木光太郎編著 『ワークショップと学び I まなびを学ぶ』 東京大学出版会、2012年、参照。
  - 17) 谷口幹也編著 『アートする力を語る 越境する想像力、転換期の美術教育』 中川書店、2017年、参照。

## **Possibility of Art Expression in Teacher Training - Focusing on the Garakuta Concert by Tomo Yamaguchi -**

Mikiya TANIGUCHI, Sawako NAKAMURA, Taro MURAKAMI  
Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities,  
Kyushu Women's University  
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

### **Abstract**

The purpose of this research is to examine the role of artists in teacher training and the significance of art expression mainly focusing on Yamaguchi's special lecture. The role of the artist is to encourage multifaceted thinking to rethink the daily workings and common sense, to reconfirm "play", and to activate "heart to try". And, our approach suggested the possibility that people connect through artistic expression and artistic expression encourages people over and over again.

**Keywords:** Art, Play, Common Sense, Teacher Training